

巻 頭 言

理系学問と文系学問のはざままで

—文理融合ということ—

井深 信男

滋賀大学教育学部 心理学教室

時間生物学会が成立してから早8年が経ち、学会もまずは順調に成長しているといえるだろう。私は学会の前身の生物リズム研究会と臨床時間生物学研究会の二つに関係していたので、かれこれ、20数年生物リズム研究に携わっている。何をしなくとも時間だけは経つもので、少年老い易く学成り難し、をまさに実感している。

この学会は医学、理学、農学、工学など多分野の領域から構成されているのが特徴である。心理学、行動科学関係の研究者は「その他」に分類されている。心理学は領域が広く、また、研究対象により方法論が著しく異なる。全く純粋に自然科学の方法論に依拠した実験系分野がある一方、調査、インタビュー、質問紙、テスト法、などを駆使する社会科学的な領域があり、最近では特に臨床心理に人気がある。私は自分の専門を答えるときに、最近では生物的心理学「biological psychology」と答えることが多いのだが、日本では定着した名称とは言えない。伝統的な知覚や認知心理学を含めても、実験系心理学は数では圧倒的に少数派である。また、実験系心理学者自身も純粋自然科学手法を用いていたとしても、自分が百パーセント自然科学者であると意識

しているひとは、むしろ稀なのではないだろうか。このあたりが、心理学の最大の特徴でもあり、鵠的存在と言われるところかも知れない。また、心理学者の多くは行動に関心があるので、行動発現に関わるマクロレベルでの要因の分析が得意であるが、一見すると現象の記述に留まっている、と理解されるかも知れない。また教育体制から見ると、心理学は文理融合型の学問ともいえるだろう。

かつて在外研究で1年過ごしたUC Berkeleyの心理学教室のZucker教授はカナダ生まれの心理学者である。彼が最初に提唱した視交叉上核は今では概日時計として確立した。その一門からRusak, Stephan, Smaleなどが出ており、リズム研究に貢献している。彼らのやり方に共通しているのは現象を生理学や生化学に還元しても、還元主義には陥らないことである。近代心理学は心を理解するにあたって、行動を要素に還元することにより、多大の成果を修めてきた。しかし、要素に還元したとき全体を見失った、との反省も重要である。たとえて言うならば、水は化学的には酸素と水素より出来ていることは、真実なのだが、水は気体に還元された時、液体というその本来の特質を失ってしまった、とも言える。

平成3年に大学設置基準の大綱化により、大学教育において一般教育と専門教育の区別は廃止され、一般教育は一時衰退したかに見えたが、ここ数年再び教養教育の充実が大学教育で声高に叫ばれ、どこの大学でも教養教育の改革に熱心である。その一つに文理融合型の教育がある。これは理系教育に特徴的な技術教育、即物教育、実践教育だけでは感受性の強い、多感な大学の時期の人間形成の教育に充分でなく、人文的教養、社会的な関心と見方、が必要なことを主張するものであり、大賛成である。

なぜこのこのようなことを出したかという、リズム研究にも同じようなセンスが必要だ、と感じるからに他ならない。分子レベルで説明された行動を自然に帰し、意味づける作業を忘れてはならない、と思う。